

## IV 全ての子どもたちの学びの保障に向けて

～考えてみましょう～

- ・先生が学習面または行動面で著しく困難を示す児童生徒のニーズに応じるために心がけていることは、どんなことですか？
- ・なぜ特別支援教育の視点が必要だと思いますか？

### IV-1 UD（ユニバーサルデザイン）の視点

#### （1）全ての教師に求められる特別支援教育の専門性

文部科学省の調査では、通常の学級に在籍し、学習面または行動面で著しい困難を示す児童生徒は8.8%存在します。そのニーズに応じるためには、特別支援教育の視点をもった授業づくり、学級経営が必要です。

平成24年7月に中央教育審議会より「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」の中で、通常の学級担任に求められる専門性として「すべての教員は、特別支援教育に関する一定の知識・技能を有していることが求められる。特に発達障がいに関する一定の知識・技能は、発達障がいの可能性のある児童生徒の多くが通常の学級に在籍していることから必須である。」とあります。

#### （2）UDの視点を取り入れた授業

全ての子どもが、授業に参加して、充実した時間を過ごすために、UDの考え方を取り入れて、工夫改善を進めていくことが重要です。ロナルド・メイス教授が提唱した「ユニバーサルデザインの7原則」により、支援や工夫、配慮した授業を目指しましょう。

##### 7つの原則

##### ①公平性

全ての子どもが学習に参加しやすい環境を整えることを目指します。

例：黒板周辺の掲示物を少なくする レベル別（進度別）の課題



## ②柔軟性

学習活動の内容や方法を柔軟に調整し、児童生徒の多様なニーズに応じることを目指します。

例：「ここだけ書いてね」あとは選択できる  
タブレット活用

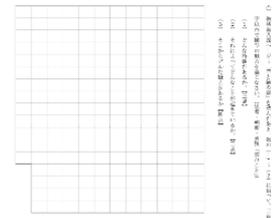


板書を全てノートに書かなければならないのは、柔軟性がない。

## ③機能性：シンプルで直感的

学習をサポートするための便利なツールやアプローチの使用です。

例：大きなデジタルタイマー  
資料にマスキングし焦点化

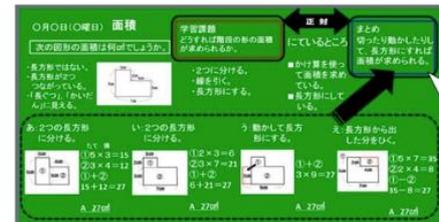


マス目があることで、どのくらい書けばいいのかがパッと見て分かる→ユニバーサルデザインの

## ④わかりやすさ

子どもが学習内容を理解しやすいよう、視覚的、音声的な支援を行います。

例：学習計画や手順・流れを視覚化



- ・ 枠で囲う
- ・ アンダーライン
- ・ 色分け
- ・ 端的な言葉
- ・ カード
- ・ 写真
- ・ イラスト

## ⑤安心感：誤りに対する寛容性

子どもがリラックスして学習に取り組めるような環境づくりを促進します。

例：座席の配置の工夫

事前に教師と練習できる時間を設ける  
一人でなくペアやグループでの活動や発表

安心感に基づいた学級経営

- ・ 間違ってもいい「安心感」
- ・ 困ったときに助けてもらえる「安心感」
- ・ 自分だけ違っていい「安心感」
- ・ 「いじめ」のような身の危険を感じることがない「安心感」
- ・ 「不登校」になっても、いつでも復帰できる「安心感」
- ・ 「日本語」がわからなくても大丈夫な「安心感」

## ⑥楽に使える

学習資源や教材が簡単に利用できるような工夫です。

例：文章や図形の拡大表示、タブレットでの音声入力、ヒントカードの使用



- ・板書をタブレットで記録
- ・フリック入力やキーボード入力の活用

## ⑦十分な広さ

教室全体での学習資源や情報を確認しやすい様に、スペースや配置を意識します。

例：教室前面をすっきりさせる、教室のどこからでも板書が見えるように座席を配置する



- ・教室前面、黒板周辺の掲示物を少なくする（スッキリさせる）

## (3) 学び方のオプション

学習に関する具体的なプロセス（学習方法、内容、ツール等）にオプション（選択肢）を組み込んで、子どもが自らの学びに適した方法を選択することで、主体的な学習を目指すことです。子ども一人一人が自分の得意な学び方を理解して、学びを進めていくことは、個別最適な学びと一致します。

苦戦している子どもだけでなく、「全員」を対象にして自分が得意な学び方を認めていく方法です。3つの方法があります。

- 1 取り組むための多様な方法
- 2 考えるための多様な方法
- 3 伝えるための多様な方法

### ① 全員へのオプション

子どもが自分に合った学習方法、内容、ツールを選べるようにすることで、多様な学び方を保障します。

「方法Aと方法Bのどちらかを選んでください」

例：ワークシートを紙とデジタルの両方で配付し「手書き、キーボード入力のどちらかを選んでください」

- ・調べ方や発表の方法「一人で、ペアで、グループ、どれで行うか選んでください」

- ・解決方法「自分で解く、友達と相談する、先生と一緒に解く、どれにするか選んでください」
- ・発表方法「全体の前で話す、録画・録音したものを使う、どちらにするか選んでください」  
など

## ② 困難を感じている子どもへのオプション

学習に困難を抱えている子どものために別の方法を提供して、サポートします。

「方法 A でやりましょう。B でやるのも OK です。」

例：暗唱が苦手な子どもに朗読のオプション

- ・話すことが苦手な子どもにタブレットの読み上げ機能を提供
- ・例文や型を提供し、それに基づいて書く選択肢
- ・先生の模範シートを参考にすることや、虫食い式シートを活用

全員がゴールを目指しますが、同じゴールや一律の「繰り返しと努力」で乗り越えさせることは、多様性を大切にする教育の方向とは異なります。一つの方法だけでなく、代替手段や誤りに対する寛容性を教師がもち、意識を変えていくことが大切です。

- ・間違ってもいい安心感
- ・困ったときに助けてもらえる安心感
- ・自分だけ違ってもいい安心感
- ・日本語が分からなくても大丈夫な安心感

解く問題数を同じにしたり、板書を全てノートに書かなければならないとしたりするのではなく「ここだけ書いてね、あとは一人一台端末のカメラ機能を活用してもいいよ」など、取り組む量や方法を選んだりすることができるようにオプションを提示します。子どもが自分に合った方法で無理なく学びを進めることができます。

UDの視点による支援や工夫、配慮は、学びに困難を感じている子どもには「ないと困る支援」、他の子どもにとっては「あると便利な支援」です。

### ➤ 振り返ってみましょう

- ・どの児童生徒も学びやすいように、今行っている UD はどんなことですか？
- ・今行っている手立てをよりよくするにはどうしたらいいと思いますか？

## コラム 【体育における UD ルールや用具の工夫】

～ みんなとできないバスケットボールから、みんなのできるバスケットボールへ ～

Aさんは、小学校6年生、通常の学級に在籍しています。下肢にまひがあり、車いすで移動をしますが、上肢は自由に使えます。知的な遅れもありません。

ある日の体育の授業は、バスケットです。TVで見るバスケットが大好きなAさん。

「ようし、やるぞ!」とやる気満々。

「でもなあ、車いすを操作していると、両手が使えないし、ボールは重いし・・・」

「スピードについていけるかな、ボール怖いし・・・」「チームに迷惑かけるかな・・・」

Aさんの思いを知った先生は、Aさんとみんなが楽しく取り組むために、バスケットボールの運動特性を生かした、こんな新しいバスケットボールをみんなに提案しました。

「床にフラフープを置き、その中に一人ずつ入ります。そこから出ません。ボールはバスケットボールと同じ大きさの軽いスポンジボールです。当たっても痛くありません。

ボールは転がしてもパスしても、カットしてもOKです。

床の真ん中に置いたゴールにシュートします。ルフル小学校バスケットボールです。

さあ、みんなで作ってみよう! 楽しいぞ!」

評価の視点は、次のようにしました。

「知識及び技能」

- ・ゴール型ゲームのルールが分かり、ゲームを行うことで、運動の楽しさを味わう。

「思考力、判断力、表現力等」

- ・友達とルールや環境を工夫したり、作戦を考えたりする。

「学びに向かう力、人間性等」

- ・ルールを守り、友達と仲良く運動する。
- ・運動に進んで取り組み、用具やルールを工夫している。

このように、ルールや用具を工夫することですべての子どもが、楽しく参加できます。また、正規のルールや用具で運動に取り組みたい子どもには、選択できる場や機会を用意し、その思いを大切にします。その際、評価の視点や規準・基準を教師が明確にすることで、子どもの取組が適切に評価されます。

## コラム 【授業や学級経営における UD の視点】

～ みんなが分かる、みんなができる、みんなが楽しい ～

### 1 授業の UD

- (1) 焦点化：1時間の授業で何を教えるか、その焦点を絞ること。
- (2) 視覚化：説明や指示などを板書や絵や写真、映像などによって視覚的に示すこと。
- (3) 共有化：子どもがペアやグループで考えを伝え合ったり、教えあったりすること。

### 2 教室環境の UD 提示物の工夫、「暗黙のルールやマナー」の視覚化 など

## IV-2 日々の授業での教授行動・授業技術

～考えてみましょう～

- ・先生が日々の授業での教授行動・授業技術で、今、力を入れて行っているのはどんなことですか？

構想した授業を実現するためには、教授行動や授業技術が不可欠です。他の先生の授業も参考にしながら、全ての子どもが「参加できる」「わかる」授業を目指し、ブラッシュアップしていきます。前述のUDの視点に直結する教師のふるまいです。

### (1) 視線

#### 基本：全員へ視線を向ける

全体指導の際には特に、子どもたち全員が視野に入る位置に立ちます。聞いているかどうか全員へ視線を向け、表情等を確認しながら話します。

子どもに発言を求める際も、発言者だけでなく、聞き手にも視線を向けます。発言に対し、聞き手がどのような反応をしているかを確認します。

何かを提示しながら子どもたちに向けて話をする際も、対象物を指さしながらも、できる限り子どもに視線を向けながら話します。

### (2) 指示・説明

子どもたちに活動を促したり、様々な内容を理解させたりするための重要な教授行動です。UDの「わかりやすさ」を大切にします。

【指示】は、どう動いたらよいのかという具体的な行動を子どもに促すものです。

【説明】は子どもたちにとって、未知の内容について、すでに知っていることを手掛かりにしながら分かりやすく述べる教師の発言です。

指示や説明には次のようなことに留意しましょう。

- ① 対象の子どもたち全員を、注目させ、聞く状態にあるか確認する。
- ② 何についての指示・説明かを伝える。
- ③ 5W1Hで内容を整理して伝える。繰り返しや付け加えは最小限に。話すスピードや声のトーンに変化をつけることも効果的です。
- ④ 内容や子どもたちの状況に応じ、音声言語だけでなく、板書等を活用し、視覚的に支援する。
- ⑤ 伝わったかどうか確認する。

### コラム

子どもがノート書いているときや、グループ活動のときなど、聴く姿勢がないときに、発問・指示・説明をしても子どもは理解できません。「いったん書くのをやめましょう。(しばらく待つ) 黒板に注目してください」と指示した後に(全員が注目していることを確認して)「それでは、これからの活動について説明をします。黒板(モニター)を見てください」など、まずは子どもの聴く姿勢を作ることが大切です。

### コラム

「1回に1文」の指示になるようにしましょう。促す行動が複数ある時は、「～して、～して、～しなさい」というようにまとめて言いがちになりますが、一つの指示で行動できたか、伝わったか確認してから、次の指示をします。また、言語指示だけでは理解することが難しい子どももいます。多様な子どもたちに対応するためには、聴覚だけでなく視覚からも理解できるように工夫します。例えば、

- ・ 発問内容を書いた紙を黒板に提示する
- ・ 作業の工程を図やイラストで提示する
- ・ 教科書のページを板書する

このように示すことも言葉の指示の理解を助けてくれます。

## (3) 質問・発問

**【質問】**は、既に持っている情報や知識を確認したり、不明な点を解消したりすることが目的です。

**【発問】**は、子どもたちの思考を促したり、理解を深めたりすることが目的です。

質問だけでは、思考は深まりません。発問は、教材の内容にかかわって、思考を子どもに促すためのトリガーです。次のことを留意し、発問することが大切です。

- ① 何を考えていくのかが簡潔に分かる
- ② 複数の異なる考えが表出される
- ③ 文章や資料、既習事項、経験などにある事実や既存の知識や技能が関連付けられて表出される

### コラム1 【発問と質問の違い(例)】

**【質問】**：調べれば分かる。

(質問例) Q 江戸時代の参勤交代は、大名たちにどのようなことを要求しましたか？

A (歴史的事実 ※子どもの考える余地がない)

**【発問】**：子どもの思考・認識過程を経るもの

(発問例) Q 江戸時代の参勤交代は、庶民の暮らしにとってよい政策だったと言

えますか？

A (様々な立場に立ったメリット・デメリットを洗い出し、整理・分析したうえで、自分の考えをまとめる。)

**コラム2** 【「バスの運転手さんは、どこを見て運転しているのでしょうか。」という発問がよいわけはなんですか？】

「バスの運転手さんは、どんな仕事をしていますか？」と聞かれたら、運転すること以外のことを考えるのは難しいのではないのでしょうか。子どもも同じです。しかし、「どこを見て運転していますか？」と聞かれると、バスの前の道路や、バスの後ろや横を走っている車、次の停留所や現在の時間、信号機などいろいろと考えやすいですね。その理由の一つは、知覚に働き掛けて問うからだと言われています。複数の答えから、バスの運転手さんの仕事を具体化することができます。さらにこの次の発問として「バスの運転手さんは運転している時に何を考えているのでしょうか？」と問うことで、ばらばらにたくさんあると思っている仕事の共通点を見出して、運転手さんの願いや苦勞・工夫を考えさせることができます。

この発問は、発問の名人とされている有田和正先生（筑波大学附属小学校を経て愛知教育大学教授、東北福祉大学特任教授などを歴任）が社会科の授業でされた発問として有名です。

#### (4) 机間指導・支援

① 一巡目は、指示通りに全員の子どもが取り組んでいるかどうか確認します。

～さっと短時間で、必ず全員の取組状況を確認します。～

② 二巡目以降は、内容に従って、観点を設けてまわります。

##### 【観点例】

##### ア 支援や援助、促進

取組状況を確認し、困っている子どもに適切な支援や援助、励ましを行います。例えば、「相談させる」「手がかりを与え、気付きを促す」「参考になる意見や活動を紹介する」などが考えられます。

また、活動が早く終わった子どもには、さらなる課題や段階、仲間への手助け等を促します。

##### イ 情報収集・評価

発話や記述、行動などの取組状況を観察し、次の活動につなげるために、全体に紹介したい考えや方法、行動を拾います。例えば、相反する意見や考えさせたい意見を机間指導により確認し、意図的指名により取り上げ、全体の活動につなげます。

## コラム

学習が思うように進めることができない子どもに支援するために、子どものそばに着いてしまいがちですが、ずっといる必要はありません。その子にとっては、分かっていないことをみんなに明かされているような気持ちになるものです。子どもの気持ちに配慮した教授行動が大切です。

## (5) 意見を拾う

意図をもって、方法を選択します。

### ① 挙手

子どもの自発的な発言から意見を拾います

### ② 列指名

「この列の人は、〇〇さんから順に意見を述べてください。」と、座席順に次々と指名します。発言の機会が均等になります。広く多くの意見を拾いたいときに適します。偶然性があり、子どもにより緊張感が生まれます。

### ③ 話合い→代表者

話し合わせる人数や相手を、ねらいや状況に応じて選択します。生活班での話合い・同じ意見同士の話合い  
ペアでの話合いなど

### ④ 机間指導等での見取り→意図的指名・紹介

教師の意図で、拾いたい意見を見極め、順番を考慮して指名します。考え同士を関わらせるように意図して指名します。

## (6) 学習内容等の共有手段

黒板や ICT 機器などの活用により、学習の目的、内容、解決方法などの学びを仲間と共有します。

UD の「公平性」を大切にします。全ての子どもたちが認知しやすい手段を選択・活用します。

### ① 板書

教師が授業の柱と考える内容を残します。学びの5つの要素(何を学ぶのか・どう学ぶのか・追求や取組の経過や結果、何を学んだのか、どう学んだのか)等を中心に板書します。子どもの

〇月〇日(〇曜日) 面積

学習課題 次この図形の面積は何cm<sup>2</sup>でしょうか。

どうすれば階段の形の面積が求められるか。

正対

にているところ

まとめ 切ったり動かしたりして、長方形にすれば面積が求められる。

- かけ算を使って面積を求めている。
- 長方形にしている。

あ: 2つの長方形に分ける。 たい: 横

①  $5 \times 3 = 15$   
②  $3 \times 4 = 12$   
① + ②  
 $15 + 12 = 27$

い: 2つの長方形に分ける。

①  $2 \times 3 = 6$   
②  $3 \times 7 = 21$   
① + ②  
 $6 + 21 = 27$

う: 動かして長方形にする。

① + ②  
 $3 \times 9 = 27$

え: 長方形から出した分をひく。

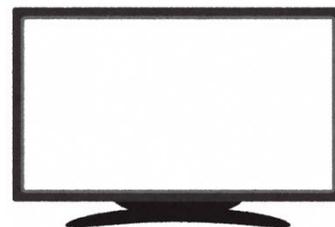
①  $5 \times 7 = 35$   
②  $2 \times 4 = 8$   
① - ②  
 $35 - 8 = 27$

A 27cm<sup>2</sup> A 27cm<sup>2</sup> A 27cm<sup>2</sup> A 27cm<sup>2</sup>

発言や思考の変容を構造的に板書することで、子どもが学びの軌跡を確認できるよさがあります。

## ② 大型モニター

画像・映像等の教材や情報を即座に共有するのに適しています。提示しているものが、全ての子どもたちに見える状態になっているか確認しましょう。



## ③ iPad

教師と子どもの中で、あるいは子ども同士で情報を個別に共有できるよさがあります。また、必要なときに、自分で仲間の情報にアクセスすることで、自分の学びの参考にしたりすることができます。



ロイロ共有ノート、スプレッドシートなどの共同編集機能は、協働的に考えを出し合ったり、製作したりする過程も共有することができます。

## ④ ホワイトボード

子ども同士が、お互いの顔を見ながら話し合う活動に適しています。思いや考えを直接聞き合い、その場で反応し合いながらアイデアを書き留めるツールとして便利です。修正が簡単なので、気軽に試行錯誤しやすい特徴があります。付箋を利用するとグループ全員が意見を出しやすく、意見の整理もしやすくなる協働的なよさもあります。



# (7) 学習内容の記録手段

学習内容を記録し、その記録を見返すことで理解をより深めたり、次の学習につなげたりすることができます。また、記録しながら覚えたり、考えたりすることも大切な学びです。

記録には、書く、タイピングする、写真を撮るなどいろいろな方法があります。

発達段階や目的に応じた方法を選択します。また、自分に合った方法を子どもが自分で選択できるように指導を積み重ねていくことが大切です。

## ① ノート

書くことで、文字を覚えたり、板書を記録したり、自分の考えを整理したりすることができます。始めは板書などをそのまま写すことから始まり、徐々に自分なりに工夫してノートをつくる力を身に付けさせていきます。低学年にノート指導をするときは、鉛筆の持ち方や何をどこに書くのかなど丁寧に指導することも必要です。特に、書くことに困難を感じている子どもには、書く内容、量やスピードに十分に配慮します。



自分なりに工夫してノートをとる力を身に付けさせるためには、個で考える時間を設定し、自分の考えをノートに書かせることから始めましょう。

## ② iPad

タイピングで文章を書く、身の回りの物を写真で記録する、歌やダンスを動画で保存するなど様々な学習過程を記録することができます。特に、ロイロノートの思考ツールは、考えを広げる、整理する、深めるなど思考の過程を保存できるものです。ノートアプリを使えば、写真や文字を組み合わせた表現豊かなノートをつくることができます。紙のノートを写真で記録して、仲間と共有することもで



これからを見据えて、キーボード入力の力を育成します。

## ③ クラウドの活用

クラウドはインターネット上にデータを保存できるサービスのことです。各種アプリで作成した文書、表、グラフ、写真、動画などは、クラウドに保存することができます。クラウド上に学習内容を蓄積していくことは、学びのデジタルポートフォリオとなり、いつでも学んだことを振り返ったり、自分の成長を実感したりすることができます。新潟市公的アカウント（～@city-niigata.ed.jp）で利用できるクラウドは、グーグルドライブ、Appleのicloud、マイクロソフトのOneDrive、ロイロノートなどがあります。たくさんのデータを精査したり、大切なデータを保存したりしていくことは育みたい情報活用能力の一つです。

## (9) 実態把握

教科のねらいに対する子どもの実態を把握することです。特に、既習内容の定着状況の把握は、単元のデザインや授業の構想に大きく関わります。

実態把握の例

- ① 既習内容の定着度
- ② つまずき状況
- ③ これまでに身に付けた学習方法
- ④ 学習内容の系統性
- ⑤ 学習対象や学習内容への興味・関心
- ⑥ 学級の風土

これらを生かして、手立てを考えます。実態に応じて、単元の習得の時間と活用・探究の時間のバランスを再考する、効果的な教材・教具を準備する、学習形態を工夫する、体験活動を設定する、コース別学習にするなど、把握した実態を生かして課題を整理し、解決の手立てを考えます。

**コラム** 【「教師が教たいもの」を「子どもが学びたいもの」へ転換するために】

子どもが主体的に学ぼうとする原動力が必要です。

子どもが、「やってみる価値がある」「自分でできるようになりたい」「やる必要がある」という気持ちになるには、子どもの実態を把握し、教たいものと有機的に結びつけることが必要です。

「 $○○○ \times \square$ の計算をしましょう。」とするよりも「調理実習で使う材料を買いに行きます。チラシから必要な食材を選んで $\square$ 人分買いましょう。」と投げかけた方が子どもに学ぶ目的をもたせます。

## (10) 授業の振り返り（リフレクション）

自分の授業を改善していくには、自分の授業から学ぶことが大切です。授業を振り返って、うまくいった点、うまくいかなかった点を考えます。うまくいかなかった原因が分からないときは、AがうまくいかないからBを試してみようと代案を立てて試すなど、前向きに解決策を考えます。

このとき、「自分が子どもの立場だったら」「自分が保護者の立場だったら」と他者の視点に立つと客観的に考えやすくなります。次の日の授業で、考えた解決策の有効性や問題点を子どもの事実から捉えて、新たな問題点の解決を次に目指すというサイクルで、学び続けることが重要です。

➤ 振り返ってみましょう

- ・一点突破全面展開という言葉があります。先生なら、まず何に絞ってブラッシュアップしていきますか？よりよくするにはどうしたらいいと思いますか？